平成 27 年 7 月 15 日

阪急阪神ホールディングス株式会社
代表取締役社長　角　和夫　殿
株式会社阪急阪神ホテルズ
代表取締役社長　藤本和秀　殿

一般社団法人　日本建築学会近畿支部
支部長　門内輝行

宝塚ホテル本館の建物の保存活用に関する要望書

拝啓　時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴社におかれましては、宝塚市梅野町 1-46 に位置いたします宝塚ホテル本館の建物を、ホテルの移転に伴い解体、再開発すること、新聞等の報道により聞き及んでおります。

本会では以前より我が国近代建築の調査研究を行い、その成果を『日本近代建築総覧』にまとめ、1980 年（昭和 55）に刊行しております。その中で本建築は価値高い近代建築として記されておりますことはご高承のことと存じます。

当該建物は、1926（大正 15）年、宝塚ホテルの建物として建設されたもので、設計者は阪神間を拠点として活躍した建築家の古塚正治です。その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代日本における歴史的建築として高い価値を持ち、地域に根付き阪急電鉄とともに地域の文化を育んできたかけがえなきものであります。

こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げる次第です。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 27 年 7 月 15 日

宝塚ホテル本館の建物についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査 笠原一人

1）建築の概要

宝塚市梅野町 1-46 に位置する宝塚ホテル本館は、1926（大正 15）年に竣工した鉄筋コンクリート造、地上 5 階、地下 1 階建ての建物である。竣工当時の建物の建築面積は 800 ㎡、延床面積は 3,927 ㎡であった。設計者は西宮市に建築設計事務所を構え、阪神間を中心に戦前から戦後に建築家として活躍した古塚正治である。施工は大林組が担当した。

川島智生博士の研究によれば、宝塚ホテルの建設経緯は次のようなものである。阪急電鉄は 1910 年代から武庫川の北側の宝塚駅周辺で宝塚新温泉や歌劇場などを開発経営し、1924（大正 13）年には宝塚大劇場を建設した。その直前の 1921（大正 10）年には、阪急電鉄が今津線を開通させて武庫川の南側に宝塚南口駅を設置し、その後その周辺を阪急電鉄とは別に地元で湯本である宝塚旧温泉や宝塚会館を経営していた事業家平塚嘉右衛門が所有し開発した。こうした中で、宝塚ホテルは、平塚と阪急電鉄が共同出資して設立された。その際、平塚が鉄筋コンクリート造のホテルを建てることを望み、高等教育を受け高い建築技術を有する古塚と知遇を得て、古塚に設計が依頼された。1925（大正 14）年に当該建物の建設工事が起工し、翌 1926（大正 15）年に竣工した。平塚は開業時から 1933（昭和 8）年まで、宝塚ホテルの代表取締役を務めたが、その後阪急電鉄、阪急グループの経営となっている。

当該建物は鉄筋コンクリート造であるが、ルネサンス風の様式建築を基調とし、独自の装飾を備えている。南側には別館の建物が建てられて竣工当時の玄関部分は外観が失われているが、建物の骨格や外観は竣工当時の特徴が残されている。屋内でも、かつての玄関付近や階段室、廊下などに竣工当時の様子が残る。建設から 90 年近く経過しているが、全体的には、竣工当時の姿を保持していると言える。

また当該建物は、1980（昭和 55）年に日本建築学会から発行された『日本近代建築総覧』に記載され、日本における優れた近代建築として早くから評価されている。また 2005（平成 17）年には兵庫県の県指定景観形成重要建造物に指定されており、地域の景観形成に重要な役割を果たしている建造物として評価されている。

2）建築史学上の価値

2-1）デザイン的価値

当該建物は、阪急電鉄宝塚南口駅に隣接する敷地に、東西に細長い建物がファサード（正

面）を南に向けて建っている。建物全体は、屋根、壁面、基壇からなるヨーロッパの様式建築に由来する三層構成によるデザインでまとめられている。そのファサードは、玄関上部に南に突出して設けられた客室部分には切妻屋根を架けられ、その破風の部分には植物をモチーフとした浮き彫りの彫刻が施され、建物を華やかに飾りたてている。また壁面には、柱頭飾りを持つ 5 本の柱が浮き彫りとして飾られ、ルネサンス風のデザインでまとめられている。玄関の外観の一部は、後年の別館の増築により失われている。

また東西に細長い客室部分の上部にはマンサード屋根を架け、半円形の屋根を載せたドーマー窓が並んでリズム感を生み出している。建物 1 階は、半円形のアーチが反復して並ぶバルコニーが、増築された別館との隙間に現存している。また建物側面や背面の 1 階壁面には、ヨーロッパの伝統的なモチーフを組み合わせた装飾や逆台形型の窓が並ぶ。このような建物の構成と装飾が、建物の外観に、ヨーロッパ伝来の様式建築のような格調高く華やかな雰囲気を与えている。

建物内部については、増築によってオリジナルの一部は失われているが、玄関ホールや 2 階に設けられた受付に至る階段は、竣工当時の姿が残されている。ここには、柱頭を持つ円柱が建ち、手摺や親柱には抽象化された植物の装飾がデザインされた大きな階段が設けられている。かつての食堂と隣接するバルコニーには壁が設置されるなど改変されているが、連続し反復する天井アーチが残されている。上階に通じるエレベーター周りの階段も当時のまま残され、上階では、内装は変更されているが、廊下と客室の配置は、ほぼ竣工当時のままである。

このように、建物は内外ともヨーロッパ伝来のルネサンス風の様式建築の構成に独自の装飾が取り付けられ、華やかな印象の建物となっている。それは 1920 年代の商業建築などに特有のものであり、時代の特徴をよく表現しているとともに、当該建物ならではの表現も持つ。建物は一部が改変されているものの、外観や内部は竣工当時の姿が比較的よく残され、竣工時の雰囲気を今も保っており、貴重な歴史的建造物である。

2-2）古塚正治の作品としての価値

当該建物は、戦前期に西宮市を拠点として阪神間を中心に活動した建築家の古塚正治の設計によるものであり、その点でも大きな価値を持つ。

川島智生博士の研究によれば、古塚正治は、1892（明治 25）年西宮生まれ。早稲田大学建築科を 1915（大正 4）年に首席で卒業後、宮内省内匠寮に勤務し、1910（明治 43）年に欧米へ留学した。この留学は、西宮銀行の頭取を務め八馬汽船などを経営した地元の実業家八馬兼介の資金援助によって実現したもので、2 年間フランスやドイツ、イギリスに滞在し、アメリカ経由で 1922（大正 11）年に帰国している。その後、1923（大正 12）年に西宮に建築事務所を開設し、独立した建築家としての設計活動を始めた。その際、八馬兼介の経営する会社の建築顧問技師に就任し、八馬が関わった会社や影響力のあった西宮市などの施設を設計した。また宝塚ホテルの設計を契機に、宝塚温泉や宝塚会館を経営した平

塚嘉右衛門の知遇を得て、平塚が経営する会社の施設の設計も担当したほか、阪急電鉄の「梅田ビルディング」の建築顧問も務めた。こうした人物や会社との関係から、阪神間を中心に数多くの建築の設計を担当した。

古塚正治の代表作には、当該建物以外に、神戸の西郷小学校（1926 年）や本山小学校（1927 年）、宝塚旧温泉（1928 年）、西宮市庁舎（1928 年）、六甲山ホテル（1929 年）、宝塚会館（1930 年）、西宮市火葬場（1930 年）、尼崎信用組合本店（1930 年）、八馬邸（1934 年）などがある。その多くは、神戸や大阪の他、西宮、宝塚、尼崎など阪神間に集中しており、多数の公共施設や商業施設の設計を手掛けている。

そのデザインは、建物ごとに異なるのが特徴である。ローマ風の格式を重視したもの、ルネサンス風の華やかなもの、山小屋風のもの、アールデコ風のものなど、要求された建物の種類に応じてデザインを変えている。当該建物については、ホテルという性格上、ルネサンス風の様式建築に独自の装飾を加味したものとなっている。

当時はまだ建築設計事務所を経営する民間の建築家は全国的に見ても少なく、阪神間を拠点にした建築家は極めて少なかった。古塚は当時阪神間を拠点に最も活躍した、地域に根差した建築家であったと言える。当該建物は、その古塚の作品の中でも現存するものとしては最初期の建物であり、古塚の代表作の 1 つである。歴史的価値の高い貴重な建物である。

2-3）地域遺産としての価値

宝塚ホテルは、前述のように、地元の事業家平塚嘉右衛門と阪急電鉄の共同出資によって、地元の建築家である古塚正治の設計により、宝塚南口駅に隣接して建設された。

宝塚では、宝塚駅周辺が阪急電鉄により 1910 年代から開発が行われ、宝塚歌団を中心として栄えた。その施設もヨーロッパの伝統的な様式建築のデザインに基づくなど、宝塚はヨーロッパ文化を取り入れた街として栄えた。その宝塚で宝塚駅周辺に次いで第 2 の開発の中心地となったのが、1921 年に開設された宝塚南口駅であり、その中心的な施設となったのが宝塚ホテルである。そのデザインは、やはりヨーロッパの伝統的な様式建築に基づくものである。宝塚ホテルの建物のデザインは、1910 年代に始まった宝塚の文化を象徴するものだと言える。

また前述のように、阪急電鉄が建設した六甲山ホテルもまた、古塚正治の設計によるものである。六甲山ホテルは山上にあることから、スイスの山小屋風のデザインで設計されているが、宝塚ホテルにも通じるヨーロッパの伝統的な様式建築に基づいてデザインされている。宝塚ホテルは、六甲山ホテルと並んで、阪急電鉄が育んだ昭和初期の文化の象徴としても位置付けられる。

当該建物は、後に南側に隣接して建てられた別館のため、建設当初よりはその姿が見えにくくなっているものの、現在でも駅や阪急電鉄の車内から確認できる。宝塚や阪急電鉄の文化の象徴であり、また駅前の重要な景観を構成していると言える。

3）期待される活用

前述のように、当該建物はそのデザインに大変優れ、また地元の事業家と阪急電鉄とによって設立され、地元の建築家によって設計されたもので、地域の景観形成にも寄与している文化的歴史的価値の高い建物である。このような優れた歴史的建造物が失われるようなことがあっては、我国の建築文化にとっても大きな損失である。

当該建物のような鉄骨鉄筋コンクリート造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の世界的な潮流となっている。世界遺産の登録などを行うユネスコ（UNESCO）の諮問機関であるイコモス（ICOMOS）は、2011 年 6 月に「マドリッド・ドキュメント」を採択したが、その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした 20 世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念を提示し、積極的に活用し使い続けていくことによる建物の保存を提言している。建物の保存活用は世界的な潮流になりつつある。

当該建物は、現在も竣工当時の機能を大きく損なうことなく、現在に至るまで使い続けられ、高い歴史的文化財的価値を維持している。今後も、現在の建物の姿を保存・維持しながら、活用されることが望ましい。よって多角的なご検討と叡慮により、当該建物の保存と活用が計られるよう切望するものである。

宝塚ホテル本館（撮影：笠原一人氏）

1　正面

2　背面

3　側面

4　旧エントランスホール

5　旧エントランスホール階段

6　旧バルコニー